

中国・唐の首都だった長安を手本に、「平安京」の都市計画を立案した和気清麻呂。
中国から伝来した仏教建築を「平等院鳳凰堂」で独自の様式に昇華させた藤原頼通。
大陸から学んだ文化、技術をもとに現代に通じる日本のカタチを築いた人物がいた。

偉人伝

the life of a great person

土木
建築

VOL.11

建築

「九九二年～一〇七四年」

藤原 頼通

Fujiwarano yorimichi

極楽浄土の世界を
独創的な発想で
カタチにした



藤原頼通は992年、摂政太政大臣であった藤原道長の長男として生まれる。1017年、26歳で頼通は摂政となり、後一条天皇に代わって政務を行い、その後は後朱雀、後冷泉天皇の御世にて50年にわたり関白を務め、藤原氏の強大な政治基盤を築いた。

1052年、頼通は父・道長の別荘であった宇治殿を寺院に改め平等院とした。この年は仏教の思想で、釈迦の教えが衰退し世界が乱れる「末法」が始まる年と考えられていた。1053年、阿弥陀如来を安置した中堂、翼廊、尾廊からなる阿弥陀堂を朝日が入り込む平等院の東側に建立。左右の翼廊は床高が高く、人が歩くことができない装飾である。また平等院は周囲を池や掘割で囲われており現世と切り離されたような空間で、当時の人々から「極楽いぶかしくば、宇治の御寺をうやまえ」と歌われたほどである。

江戸期に入ると阿弥陀堂は、屋根に鳳凰が載せてあることや建物の形状が鳳凰に似ていることから鳳凰堂と呼ばれるようになる。

頼通は独創的な発想で極楽浄土の世界を再現し、伝統的な仏教建築に新たな風を吹き込んだ。

土木

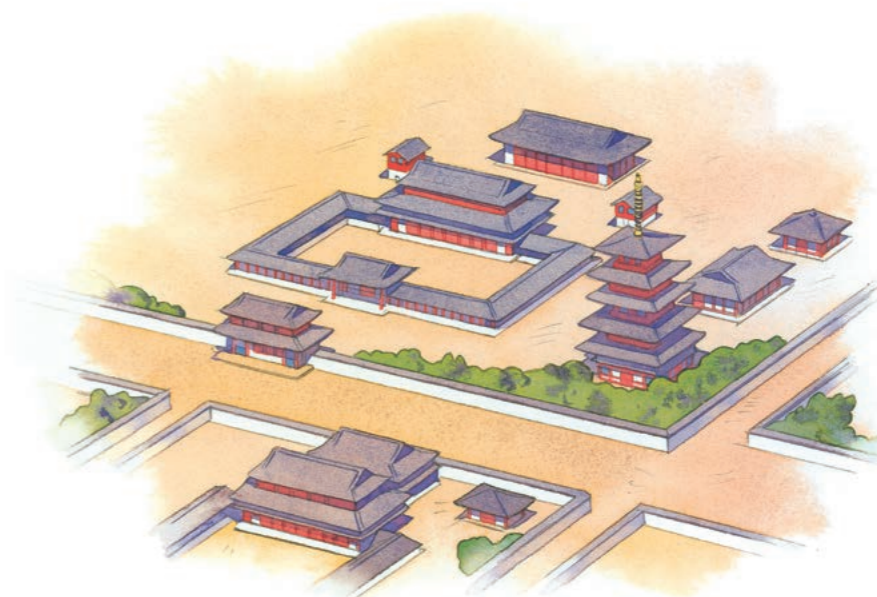
千年以上続いた都
「平安京」の
計画を行った

和気 清麻呂

Wakeno kiyomaro

清麻呂

「七三三年～七九九年」



和気清麻呂は733年、備前国藤野郡（現・岡山県）に生まれる。地方豪族出身であった清麻呂は766年、従五位下の地位を授かり近衛将監に任ぜられ官職に就く。769年、孝謙天皇の太政大臣であった弓削道鏡が天皇に代わり国を治めようと画策し、宇佐八幡宮から偽りの神託を得た。不審に思った孝謙天皇の命を受けて、清麻呂は宇佐八幡宮で新たな神託を受け道鏡のもくろみを阻止した。清麻呂は道鏡の怒りを買って大隅国（現・鹿児島県）に流刑となるが、その翌年に孝謙天皇が崩御、道鏡は失脚し再び奈良の都へ戻る。この一件で清麻呂は、後を継いだ光仁、桓武両天皇に信頼され摂津大夫に任ぜられた。

摂津大夫として23万人あまりを投じ、河内・摂津の境に濠を掘削して堤を築いたり、河内川を引き入れて荒地を開拓するという土木事業の指揮をした。793年、葛野に都を移すことを桓武天皇に提唱、造営大夫に任ぜられ平安京の建設に尽力する。平安京は唐の都、長安を参考にして碁盤の目状の道路、南北を連なる大通り、北部中央に政庁を配置した。

清麻呂がつくった平安京は1,000年以上にわたり天皇が居を構え続け、この都市構造は現在の京都にも受け継がれている。